

◆今年の日本各地では、今まで起り得なかつたような事象が起きている。異常気象や災害も比較にならないような事態で、次々と発生している。当分収まらないだろうという予測が当たるとは思うほどである。被害は甚大であり、一刻も早く終息することを願っているのだが、身の廻りを眺めると、砂利道だったところがいつの間にか全てアスファルトに変わり畑や田んぼだったところは住宅や工場になり草の生えていた側溝もコンクリートという人間様に有用が第一となっている有様である。降雨の水は、農地や敷地に浸透することなく、すぐに流水となり河川に集まり海へと下る。そして海水の上に重なり、今まで以上に厚みを増した雨水は蒸発し早々に雨雲となり日本各地にもどってくる。そんな自然の異常は我々人間世界が引き起こしていることに無頓着なのではと思う。自然をもっと大切に考えたい。氷河の溶解も心配である。

池田桂一

◆旧友の藤本みき江さんから、二〇一一年に歌集『子育てメモリー』を自費出版した後このたび『レジリエンス（回復力）』（文芸社刊）を出版したという電話があった。八十歳を超えても元気な声のひびきが伝わってくる。早速、本屋で取り寄せてもらった。本書は二部形式で、一部は彼女の来し方をエッセイとしてまとめ、二部は短歌作品になっている。時の流れの中で、知り得なかつたことも時系列にまとめてあるので、時どきの思い出が浮かんでくる。出版のお祝いをしようと行って、久しぶりに逢うことにした。

市川茂子

◆玄関のものの掛け、三つある突起の一つに、子ども用の麦藁帽子がかかっている、真ん中に（デフォルメされた）可愛いワニの絵が描いてある（緑色）。SHINPEI と添えてある。SHINPEI は紳平、三男で、長くチビちゃんだが、もう三十歳になる。母さん（私からすると元の連れ合い）が描いたものだ。二十五年余りそのままだったのを、その埃にこわばったようなのを、今日思い立って洗濯機で洗ってみた。ネットを使ったものの、くねつとした感じになった。乾いたら、元のところに戻すつもりだが、何だかそこからまた新しい時間が経つような気がする。

小野澤繁雄

◆山形に皇太子殿下がおいでになった。高校総体南東北大会にご臨席のためである。天皇陛下がお出ましになることを行幸、皇太子殿下がお出ましになることを行啓ということを知った。行啓先のことをいろいろお調べになっていることやお氣遣いのことのほかあたたかいお言葉をかけていただいたことに感動を覚えた。皇太子殿下として彬々ひんびん漂うお姿とともに、常に公人としてある殿下のご苦勞を垣間見た出来事であった。

神村ふじを

◆六月七日に梅雨入りした東京はしばらくの間は空梅雨模様であった。その間、北九州は猛烈な雨量と洪水による被害が出ていた。ちょうど五十五年前、両親と阿蘇、別府、霧島を旅行したことがあった。霧島では霧島館の離れに泊まった。その夜は豪雨であった。床下を轟音を立てて雨が流れ、本館からも孤立したまま不安な一夜を明かしたことがあった。翌日は西鹿兒島へのバスが不通となり、タクシーで向かったが、大きな岩が道路を塞いでいた。大分市桜ヶ丘に住む「小径」の日野先生にお伺いしたところ、被害はなかつたものの「怖かった」の一言。あの九州男児にして……と思った。

河村郁子

◆上京するたびに会っていた文通友達が、六月に発見の半年おくれた直腸癌の手術をした。江東区の娘夫婦のマンションに同居する彼女は区内のビルに週四日、お掃除に通っていた。七十歳過ぎててもやめさせられずに働けることがいつも嬉しそうだ。人柄の良さのせいかと思う。だが今も点滴だけ。重湯も駄目らしい。点滴だけで骨と皮になったと言ってきた。見舞いも少し待ってと。時々ハガキは書くが、昨日は元気の出そうな本を探しに行った。実は彼女は手紙は書くが、活字には無縁な人だったのを思い出して戻ってきた。困っている。

河内愛子

◆今年、こちらでは雨が少なく、いつのまにか梅雨あけになりました。その代わり連日暑く、閉口しました。毎日クーラーのお世話になっています。今は台風がきていますので少し涼しく、夜など寒いくらいの時もあります。地球温暖化でそのうち氷河がなくなり、白熊がいなくなるのではと気がかりです。

谷垣満壽子

◆七月十五、十六日と飯豊連峰を縦走した。昨年、一昨年と台風接近で取りやめて、今年やっと実現した。コースは一日目、山形県小国町の温身平から、石転び雪渓を登り稜線に達し、御西小屋泊まり。出発してから十二時間近くかかった。二日目、飯豊本山、切合小屋を通り飯豊町の大日杉に下山。九時間を要した後半三時間は本降りの雨だった。同行者はTくん(48)、Nくん(50)、Yさん(61)。63歳の私にはなんともきつい行程だった。彼らも異口同音に「一人だったら絶対に来なかった」と言っていた。普通は二泊三日のコースだ。遭難多発地帯の石転び雪渓を、好天のなか無事通過できたのは幸運という他ない。これからは、ゆつくりと景色や高山植物を眺める登山にしよう。体力の限界に挑戦するのは、もうこ

りごりだし、できない。

新野祐子

◆毎年のことだが今年もまた、友だちに八ヶ岳高原の別荘に誘われた。七月半ばの東京の暑さに閉口していたので大喜びで出掛けたが、今年の八ヶ岳高原は毎日雨降り、涼しさを通り越して暖房がほしくなるような寒さである。大好きな牧場散歩にもいけなかったが、それでも雨の合間にさまざまな小鳥の音が聞こえ、樹木が多いのも気持ちいい。何回いつても、やはりいい所である。

松井淑子

◆日本だけではないのだが、天候不順で困る。雨が多く、それもまとめて降るので本当に困る。東京はまだよい方で、九州などと同じところにかさねて雨が降り、山がぐずれ川をせき止め水があふれる。そこに住んでいる方たちのことを思えば、ブツブツ文句は言えないのだが、早くさわやかな秋になればと願っている。

丸山弘子

◆「布宮さん、あなたのご自分で偉い仕事をしていると思っっているでしょうが、本当の仕事をしているのは、あなたのご主人ですよ」。父はある時期、原稿をいただきに泉岳寺の方丈様のもとに足繁く通っていた。そのひたむきさに心打たれた方丈様が、母に放ったのが冒頭の言葉だ。その後、さまざまに時は流れ、今、二人は泉岳寺に眠る。母の十三回忌、おかげさまで終えることができました。ありがとうございました。

山内裕子

◆破裂音がして窓を見ると、ビル群に限る空に花火が上がっている。見つめていると、まもなくやんだ。

三〜四分だったろうか。その翌晩も同じ頃、花火が上がった。手を止めてみると、今回も短くやんだ。その方面で、江戸の頃からつづいている夏祭りでもあるのだろう。確か前の年にも、このような時期に花火を見たように記憶する。花火は「長岡の花火」とか「大曲の花火」とかいつて、放映される有名な大会もあるが、こうした小規模の打ち上げもまた、別の趣があつていいなと思った。

結城  
文

